武神館　伝書

山　さんみゃく　脈

第二巻　第二号

平成六年　八月十日発行

山　やまびこ　彦

武神館十勇士の誕生

必勝達磨像　　宗家画

皆さんもご承知のように、昨年のテーマは六尺棒術と体術でした。

さて本年、平成六年は、槍術と小太刀と体術であり、平成七年（１９９５年）は薙刀と太刀と体術、平成八年（１９９６年）は、秘剣と体術です。このように、武神館の大切な軌道を作ることにいたしました。この軌道は、実戦に生きる戦いの「奇道」に連なるものと言っても良いでしょう。

行雲流水、武神館の武風は、現在私と稽古できる縁のある者のみが会得する季なのでしょうか。武神館の奇縁奇道の時とも言えましょう。そこで、稽古で結ばれる環境を自分で作り出せる者、武風に対する信念と自覚のある者、一例としてまず東京武道館での稽古に多く出席した者の中から、三～四十代の中堅修業者を結びとして、十勇士として選任いたしました。そして高段者の中からも、東京道場での一貫者を四名選び、十勇士の後見人といたしました。

十勇士の面々　左から長瀬弘・蓮沼与一・本間正吾・安江建二・酒井一弘（敬称略）

人間、正しく生きるためには、規律を守らなくてはいけません。武風の規律には、奇律という虚実があります。これには武士の言う「腹芸」の修業も必要です。そこで時には、世界の武友にもトランスレートすることなく、音として武風を会得していただくこともあるでしょう。稽古とは、詞韻波羅密大光明の一筋の光に包まれて、一貫することです。そこに、奇律を見る目が、耳が、六感が、奇妙なる自然の生命力と結ばれるからです。独り稽古をする時も、自分の意識よりも自然に湧いてくる感覚を養いながら一貫することです。

この奇光が本道を照らしてもくれるものです。この照らして下さるフィラメントまでの電源、これを音で聞くと「伝源」となるのです。

私はいつも師が語られた音と光に包まれて生きておりますが、初見良昭が本道だと考えるのは間違いです。私が継承した、九流派・数百名の宗家が本道なのです。この本道に生きるとき、自然的正義の意識、その神心神眼の意識にリモートコントロールされることが大切なのです。ここ数年の私は、このように想うようになりました。
そのためか、私はすべての行動が無計画でありながら本道を歩いているので、命の灯、幸運の灯、幸福の灯に照らされております。

「自然的奇律」の一例として、先師が極められたお言葉を大切に会得してください。これは戸田真龍軒先生が神伝不動流伝書に書き記されて高松寿嗣先生に伝授され、そして高松先生が私に伝授してくださったものです。

十勇士の面々。前列左から
岩田喜雄・原田正範・中太啓治
後列左から吉田信一・染谷賢一
（敬称略）

体術の極意は平和の基礎と知れ
　学べば不動心の道にありける

道場訓

一．忍耐は、まず一報の間とぞ知れ
二．人の道は、正義なりと知れ
三．大欲と楽と依怙（たよること）の心を忘れよ
四．悲しみも恨みも自然の定めと思い、唯不動心の悟りを得べし
五．心常に忠孝の道を離れず、深く文武に志すべし

右、五定を守ること、道場の規定なり。

明治二十三年　春正月　記
　　戸田真龍軒正光

昭和三十三年　三月吉日
　　高松寿嗣翊翁
　　伝
　　初見良昭白龍

五定、級位・段位・地水火風空の自然位において、神心神眼の極意が会得される也。

平成六年六月六日
　　初見良昭鐵山
　　伝
　　武神館道場武友一門

そして武神館十勇士一族郎党の紹介

十勇士（あいうえお順）

酒井一弘。染谷賢一。長瀬弘。中太啓治。原田正範。

蓮沼与一。本間正吾。安江健二。岩田喜雄。吉田信一。

十勇士　後見人

大栗紘一

瀬野英夫

田中　洋

野口幸雄

宗家　初見良昭

十勇士後見人と宗家。
左から田中洋・野口幸雄・宗家・
大栗紘一・瀬野英夫（敬称略）

平成六年六月六日　　記

武神鐵山

＊　次項に「十勇士」の稽古道場と連絡先を掲載します。紙幅の関係で地図は掲載できませんので、稽古を希望する方は、各道場に連絡して所在を確認してください。

なお、日本国内の門人が他の道場に出稽古に行く場合は、必ず自分の師（各道場長）の許可を得てください。

武神十勇士　稽古指導日表

道　場	場　所	曜日・時間
酒井道場 TEL 048-752-5115	杉戸町高野台ﾍﾙｼｰ ﾊｳｽ 野菜畑	土曜日　ＰＭ　７：００～ 日曜日　ＰＭ　７：００～
染谷道場 TEL 0471-24-8815	道場（自宅）	水曜日PM8:00～（青年部） 土曜日PM5:30～（少年部） 土曜日PM7:00～（青年部）
中太道場 TEL 04809-2-4664	青山貸道場 白岡公民館	水曜日　ＡＭ　７：００～ 水曜日　ＰＭ　７：１５～ 金曜日　ＰＭ　７：００～
長瀬道場 TEL 0471-55-3042	流山北部公民館 （江戸川台）	火曜日　ＰＭ　７：００～ 土曜日　ＰＭ　７：００～
原田道場 TEL 0467-32-6093	鎌倉自宅	土曜日　ＰＭ　４：００～
安江道場 TEL 0489-62-0832	越谷市中央市民会 館　３Ｆ	日曜日（第２・第４・第５） ＡＭ　１０：００～

暁天講座 オブ アルゼンチン

間中文夫
玉虎（十段）

一九九三年九月二十二日（水）小雨、神に導かれた旅が始まった。

なぜか今回の旅は、一九七八年三月にアメリカ合衆国アラバマ州ハンツビル市の米陸軍武器誘導弾学校入校というかたちで始まった、私の過去七回の海外出張とは、全く異なった雰囲気であった。

「暁天講座」にて。前列左間中師範、右宗家。
後列左よりペドロ、ダニエル、カルロス各師範。

空港で御神酒をいただきいざ出陣、第一回目の乗り継ぎ地、カナダはトロント市に向かった。トロント空港で数時間乗り継ぎ待ちをし、ブラジルのサンパウロ市行きの飛行機に乗り込んだ。客層が一変し、機内放送も最初にポルトガル語、ついでスペイン語、その後に英語という順であった。

ブエノス・アイレスの日本庭園で、
朝の散歩を楽しむ宗家

この機内にて、宗家より「三心（努力、一貫、武人の心）の型について視点・観点を変化させることを覚えよ」との、第一回目の“暁天講座”を受けた。この時、まさに機上にての御来光、本当に何か見えない力に導かれているようであった。

昔、霊峰富士の山頂にて見たそれと寸分たがわぬ、南半球の夜明けを迎えた。私はこの御来光を見て、瞬間的に武神館の武道がオーバーラップした。

太陽は、上昇し始めると光を一斉に放射する。このとき人は、太陽を見たと誤解しがちである。本物はこの光の後に、ゆっくりと姿を現わすのである。そして日中は、生きとし生けるものに恵みを与え、

夕刻には、人々にやすらぎの時を与えて、闇の中に人々を戻す。

自然が作り出す美にかなうものはないと思うが、万物の霊長たる武人（動物的な人間にあらず）が為す技は、それに勝るとも劣らないのではなかろうか。

再び、サンパウロ空港でアルゼンチン行の飛行機に乗り、現地時間二十三日午後十二時三十分、ブエノスアイレス空港に到着した。実に、二十八時間の旅程である。彼等は、こんなに遠いところから野田市まで来てくれたのかと思うと、自然に頭が下がった。

ダニエル君カルロス君、それにスペインのペドロ君ら、正装した十数名の武友の出迎えを受け、空港のＶＩＰ室にて皆さんと挨拶を交わし、簡単に今後の予定を聞いてから、一路、「六月九日通り」（世界一幅の広い道…約百五十メートル）に面した「パンナムホテル」に向かった。私は、出迎えの時の武友たちの服装・態度を見て彼らの真心が受け取れ、緊張の中にも宗家を迎える心意気を感じ、セミナーの開始が待ち遠しく思われた。

ダニエル・エルナンデス師範の道場にて。
左より間中師範・宗家・ダニエル師範

夕食後、レストランですばらしい教養を備えた原（はら）　文（あや）さんという日系人の方を紹介された。この方は三人のお子さんのお母さんですが、二つの仕事を持っておられ、公私共々たいへんな活躍をされているようでした。

この方が、仕事が休みである土曜日の午後と日曜日、それに最後の夜のパーティーの通訳として、宗家の難しい日本語をみごとに心で理解し、解説してくれました。

宗家がダニエル君に、「武神館の武道は、どうですか？」と尋ねました。ダニエル君は「数年前に医者から、『君の目は手がつけられない状態である。このままでは失明するだろう』と宣告されました。この失意のどん底から立ち直るために、自分は今までの考え方と食生活を大きく変えました。初見先生の教えのとおりに、考え方は自然流（神ながら）に、食生活はベジタリアンに。そうしたところ、目が見えるようになってきました。現在の自分は、家族と共にたいへん幸せな生活を送っています。これが自分の武神館（観）です」と答えました。

宗家は、「人間が人に到達するためには、一言で言えば『武風一貫』することである。そして、決して自分のことを考えないことだ。自分がいると他のものは何ものも入れない。そして世の中には、“奇妙なる霊”が存在することも理解せよ。このことは、自然と共に生活してゆくと自ずから解ってくるものだ」と言われた。

そこに居合わせたペドロ君、ダニエル君、カルロス君らは、それぞれに何等かの摩訶不

思議な体験を持っていると見えて、一様に宗家の言葉に深く諾いていた。「国は異なれども心は同じ」の感が、ますます強くなる今日この頃である。

二十四日（金）雨。朝食の時、宗家は「“暁天講座”の本当の意味は、早朝に実施する講座ということではない。光を見る（見つける）講座のことである。このような教えは、実戦の場に出て初めて出てくるもので、自分でも意識しては教えられない。俺の心の中に高松先生がおられるから、このように教えられるのだ」と語られた。ペドロ君、ダニエル君、カルロス君ら、皆いずれも納得していた。

アルゼンチン大会でただ一人五段に合格したマヌエル・ミヤン中佐（右）と宗家。中佐はクワトロの名手でもある。中央は原文女史。

今日は、日本庭園で武道マガジンの「MUNDO MARCIAL」社の、JORG AMBLRUSTOL氏のインタビューがあるため、雨天の中を出発。この日本庭園は、広さといい造築といい、現地の日系人が相当力を入れて造園したように見受けられた。

インタビューは、この一角にあるレストランで約一時間にわたり行なわれた。その時の談話の、ごくごく一部を紹介する。

Q… 初見先生が武道を教えるときの＜ポイントは何ですか？

A… 人に幸福を、そして自然に優しく、を強調している。これが武人の心です。

Q… 特殊な仕事の人々にも教えられているようですが、それぞれに特別な内容を教えているのですか？

A… 軍人あるいは警察官だからといって、特別な教え方はしない。あくまで人として生きる方法を教えている。それが、戦いのプロに対する礼儀である。

このやり取りを見ていて、たぶんJORG AMBRUSTOL氏は、今まで出会った多くの武道家とは、異質のものを数多く感じとったに違いない。それは、後日わざわざホテルまで挨拶に来られたことでも証明されよう。

今日本では、盛んに国際化国際化と騒いでいるが、真の国際化とは、相手の求めるものを真心を持って与えることが第一歩ではないでしょうか。いたずらにお金を出しさえすれば良いというものではないと思う。

宗家は本当に不思議な方である。三十数年側においてもらっているが、「悟りは脚下に在り」の如く、正体を見たことがありません。ときどき、やっと見たと思ったら「枯れ尾花」だった。宗家いわく、「弟子に正体を見られるようでは、宗家ではない」。また、「敵を知り、己を知れば百戦危うからず」孫子は教えているが、宗家は、「敵を知り、己なくば百戦危うからず」と教える。

二十五日（土）晴。昨日の大雨が嘘のように上がり、まさに“綺麗な空気”の名に恥じない、気持ちの良いブエノスアイレスの朝を迎えた。いよいよセミナーの開始である。

会場は沖縄県人会会館で、参加者は、アルゼンチン・チリ・ベネズエラなどからの武友、百数十人であった。会場には緊張感がみなぎり、皆の顔はやや紅潮し、「宗家の第一声によって、新しい歴史の幕を開けるのだ」という熱意がひしひしと感じられた。

宗家の、「お早ようございます。皆さんにお会いでき、共に稽古できることは非常に嬉しい。南アメリカ大陸で初めてのセミナーでもあり、色々な話をしながら、基本八法から始めましょう。準備運動は終わってますか？　さー行こう！」という言葉で始まった。宗家はまず“表逆捕り”をやるように私に命じられた。私はペドロ君を相手に、玉虎流のビデオにあるように演じた。

アルゼンチン大会にて指導中の間中師範

一斉に稽古が始まった。私は皆の間を回って指導を始めたが、多くの人に共通していたことは、“足”がほとんど動いていないということであった。しかしながら一度ポイントを教えると、かさかさに乾いていた海面が水を吸い込むように、瞬時に理解し体を動かす。それも非常に素直な動きであった。これが、アルゼンチンの国民性なのであろうか？　少なからず驚嘆した。

少し脱線するが、アルゼンチンの主産業は第一次産業の酪農と農業であり、第二・三・四次産業は今まさに進行中で、日本からも、製鉄その他の技術援助のため、多くの企業が参入しているとのことである。そして最近は、生産性の向上を図るため政府の方針で“土曜日半ドン制”（土曜日半日勤務を含む週五日半制）を実施しているそうである。これは、週休二日、週四〇時間勤務の制作を進める日本とは逆の方向である。また、シェスタ（午睡・昼寝）制度も、ブエノスアイレスのような大都市では、今は実施されていないそうである。日本の現在の不況の原因も、勤勉な国民性に合わない制度（勤務時間短縮及び消費の奨め）を取り込んだことが影響しているのかも知れない。勤労に関することは、それぞれの国民性が大きく影響するもので、先進国と言われている一部の国々を真似る、あるいはその意見を鵜呑みにする必要は、ないのではないだろうか。

武道もまったく同じことである。周りの意見に耳を貸すな。宗家がいつも言っていることであるが、基礎ができないうちに“金”になり始めたときが最も要注意である。今までに国内外を問わず、数名の弟子が“金”を求めて武神館を去り、しかも例外なく失敗している。宗家いわく、「自分が出てきたら、一歩下がり間合いを取るべし」。

話をセミナーに戻そう。

アルゼンチンの人々にとって、宗家のものの見方・考え方についてお話を聞く絶好のチャンスということで、いつものセミナーよりだいぶ時間を取った。

宗家は、例えば、「水の流れもいずれは天に登り、そして雨となって再び地上に戻り、新しい流れとなる。つまり、“表逆”一つにしても、基本の型から様々な型が発生し、そして心の自由を得る技とは、考えることなく、自然に湧く泉の如く、無尽蔵に湧き出で、そしてついには、最初の型に戻る。基本がいかに大切か、このことからも解るでしょう」というように、叮嚀に一つ一つ噛み砕いて教えたため、時間があっという間に流れ去り、第1日の予定がすべて終了した。

夜間の部に入り、ダニエル道場、カルロス道場、およびチリの有志諸君による演武が、多くのブエノスアイレス市民の参加の下に行なわれた。皆は、これまで稽古した成果を真剣に演じ、なかなかの出来映えであった。見ていた私の胸に、ジンと来るものがあった。また多くの市民の人々も、スポーツ武道とはまったく異質の我々の武道を初めて見て、相当興味を持ったようである。

演武が終わると、多くの人々が宗家のところに集まり、記念撮影やサインを求めたため、セミナー終了後もしばらくは動きが取れないほどであった。

二十六日（日）雨のち曇り。朝食時、宗家が「カルロス君は、昨夜の演武終了後、何か今までの迷いが吹っ切れたようにすっきりしたのではないか」と問いかけた。この問いに、彼は笑顔で、「そのとおりです。宗家に、真心のこもった温かいお話を聞かせていただいたおかげです。本当にありがとうございます」と答えていた。

また宗家は、カルロス君が子供を相手に実施した演武を例にして、「技は、相手の状態に合わせてかけることがいかに大切か、あの演武を見て解ったと思う。人間は愚かなもので、自分のジェラシーによって、自分自身を殺してしまうものだ。シェイクスピアのオセロもしかり。神の言葉を知らない人間は、決して成長しない。楽しみも往々にして遊びになり、溺れてポイントを外してしまうものである。技に溺れると技も本物でなくなり、自己破壊になってしまう。高段者はよくよく心すべきである」と教えられた。朝食を共にしているダニエル君、カルロス君、ペドロ君らは、食べるのも忘れて聞き入っていた。

食事とは、食べ物を胃袋に入れることばかりではない。アルゼンチンの食事の量は、日本の平均的な量のゆうに三倍はある。例えばスパゲティ・ミートソースは、ソースの上にフライドチキンが一羽まるまる乗っており、器も上げ底ではない。凄いボリュームであるが、彼等は昼食に楽に平らげてしまう。したがって朝食は、宗家のお話で十分である。

二日目のセミナーも、昨日に引き続き基本八法を実施した。いろいろな技は、後日ビデオテープを見れば解るが、宗家の武道観についてのお話はたいへん貴重なものである。特に、武神館の歴史が浅く日本から遠く離れた国の人々にとっては、それを聞くチャンスも滅多にあるものではないだけに、なおさらであろう。

二十七日（月）晴れ。朝食時、いつものメンバーに対して、宗家は「今や武神館は、世界の素晴らしい人々の中から、本当に良い指導者を選択する時代がきた。しかしながら、釈迦・キリストにもいたように、常識では考えられない行動をする者、裏切り者は必ず出

て来る。正義の武風を貫くことだ。じゅうぶんに心せよ」と語られた。

セミナー最終日は、アルゼンチンのサッカー選手が練習をしている公園での、六尺棒術であった。各種構え、面打ち、胴打ち、足払い、突きを、いずれも体術が基礎になっていることを強調しながら教授し、皆には今後の修業を期待しつつ、三日間のセミナーを無事終了した。

車はこの公園に行く途中、ウルグアイとの国境をなすラプラタ川に沿って進んだが、この川幅の広いの広くないのといったら、想像を絶する。なんと百五十キロメートルもあり、対岸まで船で約四時間もかかるそうだ。この話を聞いて、元ナチの高級将校アイヒマンが、戦後このラプラタ川の中の三角州に隠れ住んだ理由が理解できた。（しかしながら彼は、モサドの長官であったツビッカー氏に逮捕され、イスラエルに連行されて処刑された）

夜は、“ありがとうパーティー”が盛大に催された。ダニエル君たちが、一生懸命企画を立てて準備をしたイベントが、各種あった。日系三世の女性の歌、宗家も絶賛したベネズエラ陸軍の中佐ミラーン氏によるプロ顔負けのクワトロの演奏、宗家、ダニエル君、ミラーン氏らによるベサメムーチョの大合唱。さらに、プロダンサーによる本場アルゼンチンタンゴのダンス。これは本当にすごかった。息をするのも忘れてただ見つめてしまった。玉虎流体術のようにつかず離れず、その素晴らしい間合いと無駄のない華麗なる動きは、実に見事でした。私も、あのくらい強烈に人に印象を与える技を身に付けたい。一生忘れないであろう。ありがとう。

パーティーもいよいよ佳境に入り、皆の心が一点に集中する。宗家の挨拶に続いてダニエル君が感謝の言葉を述べる番になった。感極まったダニエル君が、遂に大粒の涙を頬に伝わせると、もう次々に大の男が感涙に咽んだ。私にも一言のリクエストがあり、私は一気に「……人は石垣、人は城、情けは味方、仇は敵……」と語りました。胸がつまり、通訳のために途中で話を止めると、もう声がでない状況でした（原さんは武田信玄のこの歌を知っており、完璧に通訳してくれた。大したものである）。

“ありがとうパーティー”で、心からのプレゼントを受ける間中師範

話は横に逸れるが、数年前に英国とアルゼンチンの間でフォークランド紛争があったときの逸話である。ブエノスアイレス市民は、フォークランド島は同市よりも数千キロ南にあるため、この戦争の影響をほとんど受けなかったらしいが、外国からの観光客はほとんどなく、ひっそりと生活していたそうである。ところが日本からの観光客は、ここは安全だからといつものように観光を楽しみ、夜は夜で日本人だけがレストランでワイワイと食事

をし、あるレストランの主人に、「さすがに日本人は武士の子孫だけに、戦争をも恐れず大したものだ」と言われたとのことである。この頃、ブエノスアイレス在住の日系人は肩身が狭く、穴があったら入りたいような思いをしたという。

このように、アルゼンチンの人々は、宗家が行く以前は、多分日本人に対してあまり良い感情を持っていなかったと思われる。そうしたアルゼンチンの人々と、共に涙を流すことができ、ここに改めて人間性がいかに大切かを実感し、また宗家の世界に通じる人格の素晴らしさを今更のごとく痛感した。

この日、ホテルに戻ってベッドにもぐったのは、午前二時であった。

二十八日（火）曇り。ダニエル君、カルロス君ほか、弟子十数名の見送りを受けて、短い期間ではあったがそれなりの成果を残し、帰国の途に着いた。これから日本までの二十数時間、最後の“暁天講座”が開かれた。

宗家は言われる。「ことに臨んで逃げる奴は、最低の人間である。そしてこういう奴に限って、自分を正当化するために良い格好をするものだ。こういう人間の言うことに耳を貸す必要はない。時間の無駄である。今回、アルゼンチンの一部の弟子が、武人の心を忘れて参加しなかったが、何のために修業しているのか、本質を考えてみてもらいたい。指揮官の最大の責任は、適切な状況判断にある」

初見先生という巨星が我々の流派に現われ、今まさに流派の花が開かんとしている。自分自身の常識なんて、ちっぽけなものである。例えば交通信号にしても、アルゼンチンでは基本的に、青ー黄ー赤ー黄ー青の順であった。そして、片側七車線もある道路にほとんど線が引いてなくても、阿吽の呼吸とでも言おうか、自動車は事故も起こさずうまいこと走っている。

武神館に席を置く世界中の武友の諸君、一様に心豊かに、より相互信頼を深め、思いやりの心を堅持して修業の道を歩もうではないか。社会（他人）の評価は、修業の最終目的ではないが、まじめに修業していれば、名誉と地位と富は、必ず後から着いてくる。

私にとって今回の旅は、寝るとき以外は宗家と共にあったため、頭が三つ満タンになるほど“暁天講座”を受けることができて、たいへん幸せであった。いつの日か、宗家と話ができる時がくるのを楽しみに、ここに筆を置く。

詞韻波羅密大光明

山　彦

修業というものは、なんでもそうだと思います。私は高松先生について十五年間修業しましたが、その十四年目に、「もうお前には全部教えました。もう大丈夫や!!」と言われました。私はその瞬間、高松先生は心の中では、「お前は武道的才能がないからもうあかん!!」（「あかん」は関西の方言で、「駄目だ」という意味）と思われているのではないか？　と落胆いたしました。

それから一年後、高松先生が他界なさいました。それからの私は、空白と悲しみの宇宙を彷徨う、「天上天下唯我独尊」の一人稽古にと一転されました。ちょうど、宇宙衛星の中に一人道場を作ったようなものですね。

そして十五年、遊泳中に御来光を見たわけです。いま考えると、オハイオのデイトンで、ヘイズ君やバード君、ジャック君やるみ子さんに、「アイアムＵＦＯ」と言ったのも間違いではなかったのですね。

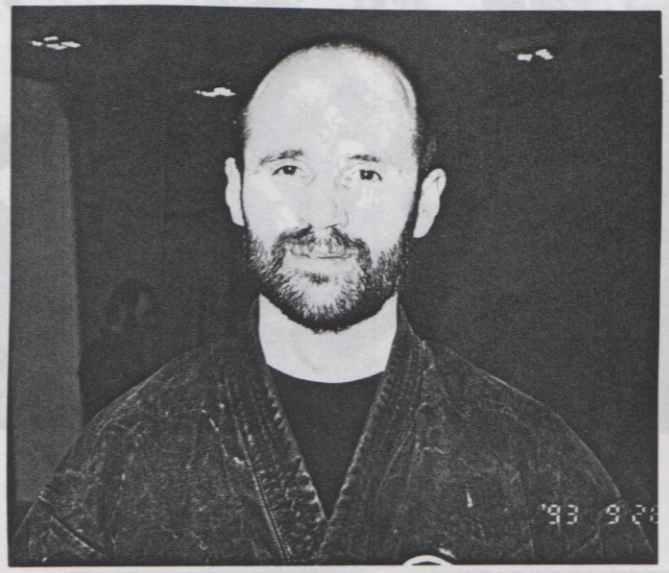
宇宙遊泳のできない一人稽古、これは危険です。自分の考え方や常識・知識などの蓄積が、ともすれば重さとなり、宇宙遊泳の妨げとなってしまうからです。いま私が教えているものは、自然界から生まれる武風です。言い替えれば、空間に表される、永遠で偉大な光と影の虚実の兵法を伝授しているのです。この光は物理的・科学的に求めても不可能な光ということになるわけです。

一筋の光は、一貫することにより、誰の心の中をも照らしてくれるものです。神眼力というものは、こんなルーツの中で伝授されて行くのです。

平成六年三月二十一日　彼岸　春分の日

1993年アルゼンチン忍術大会BUDHA大会

初見先生がこの大会で私たちに教え残してくださったことは、とても言葉に表せません。それは私たちが理解できないということではなく、私たちの魂に焼き付いた、愛と理解に満ちた先生の教えは、果てしない空のような広がりを持つからです。弱い者を強い者から守り、横柄な態度を慎み、また、清い心をいつまでも持ち続けることが、私たちに残された使命です。



ダニエル・エルナンデス師範

人間同士の争いや血の流し合いが多いこの世の中ですが、初見先生の教えに忠実に従えば、傷ついた人類に、少しでも救いの手を差し伸べることができるでしょう。私たちが力を合わせれば、この世の中からカルマ（輪廻）を取り除くことも可能です。

悪の力に立ち向かうための忍の術が生まれたのは、今から三千年前のことですが、それは長い年月の間に、人々の記憶から遠ざかって行きました。

カルロス・エチェガライ士道師の「親子鷹」

人間の記憶ほどもろいものはなく、平和な時代が続くうちに、忍術についての知識を持つものが少なくなって行きました。しかし、火山の中から蘇ったフェニックス鳥のように、改めに忍の術が世界で注目され始めたということは、現在の波乱に満ちた世界のありさまを物語っているのでしょうか。

初見先生がこのたび残してくださった貴重なメッセージや教えは、巻物に記録しておくべき生命力と知性にあふれている雄言葉ばか

りですが、今回、できる限り正確にまとめようと努力しました。

初見先生ご自身、アルゼンチンに一歩足を踏み入れた瞬間に、今回の大会は生涯皆様にとって記憶に残る、光に満ちた大会になるのを感じられたそうで、実際、ＢＵＤＡＨ大会は素晴らしい大会として実現しました。

先生がご到着なさる前まで、ブエノスアイレスでは一週間余り雨が降り、じめじめとした寒い毎日でしたが、いよいよ先生がアルゼンチンに着かれた日から、まるで太陽までがこの大会に参加したがっているとしか思えないほどの、素晴らしい天気に変わりました。

腹に銃弾七発を受けながら生存するマヌエル・ミヤン中佐による、捕虜に木を抱かせて、縄を使わずに捕縛する方法の指導

アルゼンチンの青空を眺めながら、これも先生の力と魔法だと、しみじみ思わずにはいられない気持ちになりました。

大会は、９月25日と26日に、アルゼンチンの首都ブエノスアイレスの市内にある沖縄県人会館で行なわれ、27日は市内の公園のグラウンドで、トレーニングが続行されました。

９月23日（木曜日）は、長い旅の後、無事にブエノスアイレスに到着なさった初見先生と間中先生をお迎えし、すぐにセンターにあるパナメリカーノホテルで少し休息を取っていただくことにしました。その晩は、先生方を囲んで「日本橋」という日本食レストランに皆が集まり、さっそく再会の喜びを分かち合いました。その時の出席者は、初見先生、間中先生をはじめ、ペドロ・フレイタスとカルロス・エチェガライ士道師たち、通訳のあやさんとまゆみさん、弟子であり先生の移動車の運転もしたグスータボ、そしてこの記事を書いている私、ダニエル・エルナンデスというメンバーでした。

宗家による白刃捕り。宗家は「刀は捕るというより止める感じ」と言う。

先生たちの会話の中には、新しい技についてのコメントもあり、和気あいあいとした雰囲気の中にも、大会はすでに始まっているという緊張感が強く感じられました。

24日（金曜日）には、日本庭園で先生方と記念撮影、その後、アルゼンチン武士道という雑誌社からインタビューを受けました。その後の昼食会もにぎやかで、初見先生と間中

先生を中心に、ペドロ・フレイタス（カナリア島出身）、マヌエル・ミヤン（ベネズエラ出身）、カルロス・マンテン・ロドリーゲス（カナリア島出身）、松堂隆さん、まゆみさん、カルロス・エチェガライ士道師、それに私と妻が出席いたしました。

レストランを後にして、私の道場にご案内しました。そこでは多くの生徒が、先生方に一目お会いしようと待ち構えており、この度のご訪問の記念するために弟子たちが描いた天狗の絵を見ていただき、楽しい一時を過ごすことができました。

翌日と日曜日には、先生方はカルロス・エチェガライ士道師の道場を訪問され、そこでも多くの関係者たや弟子たちと記念写真を撮ったり、先生のお話を伺ったりしました。

カルロス・エチェガライ道場の庭にて。
皆でコーラで乾杯

25日（土曜日）は、いよいよ大会開始となり、初見先生の指導によって、戸隠流の基本八法、一文字の構えと変化、間中先生の潜り型飛鳥と十文字、表逆、裏逆等を手とり足とり指導していただきましたが、あまり型にとらわれず、自然に自分のペースで修業して行くのが正しいと先生に教えていただきました。

26日（日曜日）は、表逆と裏逆の復習に続いて武者捕り、岩石投げ、潜り岩石等の練習を、間中先生に指導していただきました。練習をしながら初見先生が教えてくださったのは、昔から東洋医学においては、人間の体の中で、足は心臓同様に重要な役割を果たしているということでした。

翌27日（月曜日）は、素晴らしい天気でしたので、大会はブエノスアイレスのある広々とした公園で続けられ、体術・棒術・正しい棒の使い方や足の動かし方などを習い、最後

ガウチョのボロの演技。ガウチョの精神は小さい者を助けるものだという
日本も、昔困っていた時代に、何回もアルゼンチンの援助を受けている

に全員で記念写真を撮って、アルゼンチンをはじめ、チリ、ウルグアイ、ベネズエラ、カナリア島などの仲間たちと共に、大会を終了しました。

大会のクライマックスとなった晩餐会では、別れを惜しみながらも素晴らしかった大会について遅くまで語り合い、初見先生のお好きなアルゼンチンのタンゴと舞踊や日本の歌を初め、士道師たちも参加したギター演奏、最後のベサメ・ムーチョは初見先生をリーダーとして出席者全員の大合唱に終わりました。

ブエノス・アイレスNo1のタンゴ・ダンサーと踊る宗家。「私の武風の足捌きは、ダンスとサッカーによるものが多い」と宗家は語る。

初見先生のために行なわれたエキジビジョン

25日（土曜日）の夜、８時から一般観客も集まり、ダニエル・ヘルナンデス士道師とカルロス・エチェガライ士道師とその生徒たちが、実演会を行ないました。初見先生が教えてくださった技は、生き残るための技であり、忍法のエッセンスをはっきり見せるのに役立ちました。

初見先生は、彼の技を教えに来たのではなく、人生の技を教えて行ってくれました。私はそれを、「山脈」を通して、真の忍法を理解するために書きます。

初見先生の教え

1. 人間の記憶は脆いものであるが、たまには忘れるということも大切である。
2. 実際に敵は多いが、最も手ごわい相手は、自分自身の中に潜んでいる。
3. 恐い感情の一つは、他人に対する嫉妬心である。悲劇で有名なオセロも、自分の嫉妬によって自殺をとけだ。
4. 快楽に浸っていすぎると、人間は思わぬところでつまずき、命を落とす。
5. 人にとって一番の敵は、独善や慢心である。一番になろうとするより、相手の正しい心を理解することが大切である。
6. 逸話集：

ある寒い晩、初見先生と高松先生が対話していた折り、高松先生が急に立たれ、真剣を持ってこられて「これから稽古をしよう」と言われ、コップ酒を一杯飲み干された。

初見先生は「はい！」と返事をされて、師の影を踏むことなく高松先生に従い歩かれた。初見先生はそのときの様子を、「影は青墨で描かれたように美しく、満月は黄泉の世界を照らしているようだ」と言われた。黄泉の世界とは、日本の神道で死後に人間の魂が行くと信じられているところで、死者の住む世界だとおっしゃった。

凍り付いた黄泉の世界に着いたところで、高松先生は一刀を抜かれ、やおら上

段八相に構えるなり、「初見はん、行くぞ、この刀をつかみなさい!!」と言われて、月光を背に斬り下ろされた。そのとき初見先生の手は、寒さのために開くこともできなかったので、刀の背に指を引っ掛けるようにして、挟み取りに一刀を捕ったという。

初見先生はこう言われた。

「刀は捕るものではなく止めるものです。現在、よく刀を捕る演武を『白刃捕り』と言っていますが、本当は白刃止めでストップするべきなのです。捕るということは、盗る、ぬすむ、泥棒のフィーリングになり、武風ではない」と。

7.　動きについて：

真正面から敵に立ち向かえば、相手は当然身構えます。敵に気付かれぬよう、様々な角度から立ち向かって行くことが大切です。この技は、人生の上で、また色々な立場で非常に役立ちます。

8.　体術とは：

生活して行く上での聖書、または色々な状況について正しい答を出してくれる、百科辞典のようなものです。

宗家による六尺棒術の指導

9.　決して忘れてはならないこと：

強い武士に育つことは、簡単である。しかし、優れた正しい人間になることは、たいへん難しい。

実戦では、いつも手ごわい敵を相手にするものですが、実際の敵は私自身の中に潜んでいるということを忘れてはいけません。

強くなりたいと思うならば、まず自分自身のことをよく理解して、知り尽くすことが大事です。なぜならば、いくら技の練習を積み重ねても、いざというときに自分の頭と体がぐらついてしまったら、トレーニングはなんの役にも立たないからです。

三千年の長い年月をかけて、忍術はあることを教えてくれました。自分より強い相手はいくらでもいる。忍術とは、弱い者や家族を守る技であって、必要以上に、相手を刺激したり傷付けたりするための武器になってはいけません。それ以上に、清い心を育て、武神に近付くのが忍術の教えです。

初見先生、そして間中先生。数々の素晴らしい教えを残していただいて、心から感謝しております。将来の再会を祈って、ますます努力を重ねていくつもりでおります。

アルゼンチン武神館道場
士道師　ダニエル・エルナンデス

山彦

アルゼンチンＢＵＤＡＨ大会

人間の頭脳には、記憶を司る組織が大脳の総合領に存在している。また、覚えたものが消える、忘れるという作用もここに存在する。しかし人間という個体を「脳」という一字に体変させてみると、「脳」はすなわち「能」という一字に一変することができる。これは、あまり学問的・人為的に解こうと思うよりも、武風的に解いた方が良いだろう。そう分析した方が正解のようである。

例えば水練の術、水泳を覚える場合、まず水の中に入って浮くことから体で覚えて行かないと、水泳は覚えられない。これは誰もが知っていることである。人間の生体には、一度覚えたら忘れない、あるいは覚えなくても作動する、「大脳」ならぬ「大能」の作用・作動が存在のであり、「体で覚える」ということは、その能力に他ならないのではないかと思います。

真剣型の練習なども、この「大能」を磨くためのものでしょう。例えば一度覚えた水泳、スキー、体術などは、数年経っても必要に応じて「大能」の反応によって作動するものです。このように、医学書にもない「大能生理学」が武風的学問には存在しているということを知っていただきましょう。ここで言う「生利学」も、生きるための真理的なものであると解釈していただきましょう。

いまや武神館の学問は、博士課程を学んでいるのです。しかし一般社会で決められているような博士課程ではないのです。大自然界に生きる大きな博識を、稽古し修業して学び、会得する姿勢が大切なのです。

忍者のLife Value（命の価値観）

士道師　ジャック・ホーバン

ジャック・ホーバン士道師ご夫妻

私の人生の中で、最も名誉に思った出来事の一つは、コンテンポラリー社から英文で出版された初見先生の「エッセンス・オブ・ニンジュツ」の編集をおおせつかったことです。

初見先生の著作スタイルはとてもユニークなので（それぞれの文や漢字が色々な意味に解釈され得るという点で）、翻訳をされた方は、さぞかし大変なご苦労をなさったことと思います。まさに、先生の著作スタイルは、忍法そのものです。

翻訳されたものを編集する際に、先生のおっしゃられていることを自己流に解釈し過ぎてしまわないように、校正は文法と綴りのみに留め、あとは読者自身が、言外の意味を読み取り、謎解きをするようにと、多くのミステリアスな部分はそのままにしておきました。

わたしには、この本には先生の教えの本質が書かれているように思えました。それは、「“Life”（生きること）」は忍者にとって最も重要な価値観であるという教えです。しかし、先生がここで、どんなふうに生きることが大切だとは、あえて限定していないことは注目に値します。例えば先生は、「幸せに生きることと」とか「成功して生きること」とか「豊かに生きること」とはおっしゃっていません。このような表面的な価値観は、すべて相対的なものだからです。先生は、“Life”（生きること）そのものは、最も基本的で普遍的なものだとおっしゃっているのです。

このような先生の本質的なものの見方は、皆もよく耳にする先生のお言葉にも、よく現れています。たとえば、“I am no country.”という先生のお言葉は、国とか文化とかいった相対的な価値観は、武道の本質を曇らせてしまうということを意味されており、“I have no style.”とおっしゃられているのは、特定のスタイルは体術の本質を曇らすと誡めていらっしゃるのだと思うのです。

この問題は、実際、歴史において、常に生死の問題と深く関わってきました。現代においてさえ、前ユーゴスラビアでは、命の価値がおろそかにされ、人々は「国」や「文化」といった観念に取り憑かれてしまっています。「文化」が、人間の価値の決定的判断基準とみなされるようになると、大抵の場合、文化以外のものの価値（それがたとえ命であっ

宗家の著書の一部。
左上がホーバン士道師が
編集した「エッセンス・
オヴ・ニンジュツ」

たとしても）は失われてしまいます。そして、人種抹殺が始まります。文化が命よりも重視されるとき、間違いなく殺し合いが始まるのです。

一般的に言っても、命よりお金や地位や名誉や名声を重んじる人は、たやすく人を殺してしまうでしょう。また、そのような価値観で人を天秤にかけ、見下げるような人は、心にすきを作り、自分が見下げていたその人に、たやすく殺されてしまうかも知れません。

文化の価値は相対的なものです。つまり、文化の価値は環境の違いによって、そこに住む人々の違いによって異なります。表面上は同じ文化を共有しているように見える人々さえ、お互いの価値に同意できないことが、しょっちゅうあるのです。アメリカ人は、皆同じでしょうか？　日本人は、皆同じでしょうか？　兄弟姉妹だからといって、同じような価値を共有しているでしょうか？　同じように考え、同じような経験をしているでしょうか？　答はもちろん“No”です。時には、一人の人間の文化や価値観さえ、変わってしまうことがあるものです。このように文化は、人間が創造したものであって、真に重要なものではないのです。人類が唯一共有する価値観は、おそらく、みな“自分の命と愛する者の命を価値あるものだ”と思っている」ということでしょう。我々は、文化や習慣といった表面的な違いに関係なく、唯一この“Life of value”（命の価値）という絶対的な価値に基づいて平等なのです。この人間の本質を無視して、私たち不完全な人間の気まぐれとも言える、文化価値や行動価値の方が重視されるとき、争いや暴力が起こるのです。だからこそ、世界に平和をもたらすためにも、“I am no country.”といった先生の生き方が大切なのです。

このことは、武道家には特に大切な問題です。我々は忍者として修業してはいますが、やはり一人の人間です。他の文化や他の武道のスタイルに偏見を持ってしまうこともあります。しかし、ここで忘れてはならないのは、我々の修業の目的は生きることだということです。武道を志す者の多くが、ある程度うまくなると、自己満足の世界に陥ってしまいます。あたかも自分自身の創り出した武道スタイルに、恋に落ちてしまうがごとくです。そうなってしまうと、その後何年稽古しようと、もはや上達することはできません。生死が問われる場において、武道のスタイルは、文化と同じように重要ではないのです。無になるため、自身のスタイルを棄てなければ、上達は有り得ないのです。

しかしながら、無形のスタイルを身に付けるために、長年試みてきた一見うまく行く確かな方法を棄てるなど馬鹿げていて、危険なことだと思う人もいるでしょう。でも、実際にあなたが命を落とすのは、きっと、あなたが今まで稽古してきた型以外のものによってなのです。それ故に、特定のスタイルなど無益なのです。

もう一度繰り返しますが、忍法の目的は“生きること”です。なんの飾りもなく、ただ生きることのみです。しかしながら、この“Life of value”（命の価値）には、さらに

二重の意味が包括されています。一つは、もちろん自らの命を守ること。もう一つは、他人の命を守ることです。他人の命を守ることこそが、“Warrior”（戦士）の使命です。

では戦士として人の命を守るには、我々は一体、まず何をするべきでしょう。例えば世界を駆けめぐり、強きをくじき弱きを助けるという空想は、とてもロマンティックで格好良いですが、現実的ではありません。真に戦士として生き、世界の平和に貢献するためには、まず我々が先に立って、他のすべての人間を、基本的に尊ばねばなりません。すべての人間は、貧しかろうと金持ちであろうと関係なく、頭の良し悪しに関係なく、人柄の良し悪しにも関係なく……ということです。これは、一見たやすいことのように見えますが、実はとても難しいことですし、大変な勇気もいることです。というのは、我々人間は、外見の違う人たちに出会うと恐怖心や嫌悪感を抱くものだからです。しかしながら、たとえ我々が、他人の行動が気に食わなくても、理解できなくても、もし我々が彼らの命を尊重しなければ、自然と争いや暴力が起こるでしょう。この世には、貴方よりお金持ちで賢く、良い人間はいないと言い切れますか？　彼らの命は、貴方の命より価値があるのでしょうか？　貴方にとっては、そんなことはありませんよね。故に、すべての人の命は価値があり平等なのです。すべての人に命の価値を見いだし、その価値観を擁護し守るための勇気と自信を武道は与えてくれるでしょう。文化、スタイル、肌の色、イデオロギー、行動などではなく、命こそが、最も重要でこの地球上において普遍的な価値観なのです。命こそが、守る価値のあるものなのです。命を守ることこそが、我々の修業のゴールなのです。

山彦

命の価値観、その生きようとする姿の映像は、実社会でまた芸術作品の中でしばしば見られます。そのような姿は感動を呼び、涙と共に心が洗われることがあります。

こうした例は、映画「風と共に去りぬ」の一シーンにも見ることができます。スカーレット・オハラが、南北戦争によって住む家も食べるものもなくし、愛するものが次々に死んで行く……　そんな中で、「私は飢えのためには泣きません」と言うシーンがあります。この「飢え」というのは、心の飢えと肉体の飢え、つまり心身の飢えとみるべきでしょう。ビビアン・リーの演じたこの作品に、私も涙したものです。

ジーン・ベスキー・エルシュテインという方が書かれた「女性と戦争」という本の一節に、「南北戦争中の北部の状況は、こと愛国的女性に関しては南部の考え方と共鳴し合う響きを持っており、英雄的行為と自己犠牲についての色々な話が語り継がれている」とあります。

最近、「フーテンの寅」でお馴染みの映画監督の山田洋次さんが、「学校」という映画を作りました。この映画には、通常の生活ではないためまたは何らかの理由で昼間の学校に通えない生徒たちが、「幸福とは何か」について語り合うシーンがあります。「僕たちは何のために夜学に通っているのだろう？」「どうして勉強しているのだろう？」というような会話の中で、ある人が「幸福って何だろう？　それを知るために勉強しているんじゃあないかな」と言うシーンがあります。

私はそれを見たときに、「武道もそうだね、幸福を知るため、自覚するために稽古しているんだよな!!」と、自分から進んでスクリーンの中へと入り込んで行きました。

忘れられない瞬間

スヴェネリック・
ボグセター（十段）

1993年10月のマドリード大会で、私は宗家から、「『武神館伝書山脈』のために、何か棒について書いてください」と言われました。

そのとき私は、「どうしよう？」と思いました。そして同年、フランス・パリ大会で宗家が自分の部屋で、当時発売になったばかりの六尺棒術のビデオについて私に語ってくださったことを思い出し、宗家にそのビデオがとても好きだと言いました。しかし、驚いたことに宗家は、「いや、私はあれがそんなに良いとは思いません。師範たちの中で棒の使い方を解っている人はいないから、かなり低いレベルで作らなければなりませんでした。だから初心者のためのビデオです」と答えました。側で聞いていた野口先生は、宗家言葉を聞いて、同意して諾いていました。

何という罠でしょう！　日本の師範方も棒のことが解っていないとしたら、私などは何を知っているのでしょう？　その答えは以下にあります……。

どのように書いたら良いのでしょうか？まず、マドリードの大会で起こった出来事を描写すれば良いのかも知れません。私を骨まで怯えさせ、びっくりさせた出来事です。

記憶が間違っていなければ、大会の最後の日のことでした。中段の構えからの突きを練習していましたが、宗家は構えの正しいやりかたの重要性を指摘し、この構えからの突きにおける極意も、詳しく説明しました。しばらく自分たちで練習していると、宗家はいつもの通り、私に前に来るように手招きしました。そして水月を突いて来るように言われました。私は頼まれた通りにしました。

稽古中のスヴェネリック師範（左）。
スヴェネリック師範のマグニチュードは？

そのとき起こったことは、人間の（少なくとも自分の）容量を遙かに越えたものなので、説明しようとするのも大変難しいです。これは言い訳ではなく、それ以来何回も自分の頭の中で思い返してみたのです。

とにかく、私が突いたのを宗家が柔らかく、ほとんど棒にも触れないで（剣で）受けたら、起こったのです。
私はとても妙な感じで、彫像のように硬直していました。でも、堅くなったのではなく、むしろ何かが自分の意志を止めた、あるいは自分の心が妨げられたようでした。宗家が剣で棒を打ち落としたとき、私は手に痛みを覚えて初めて目覚めたのです。

私がそこに生きた疑問符のように立っていたら、宗家は「スヴェネリックさん、もう一度」と言いました。私は今度は、前回よりもたくさんの力と意志で棒を彼の方に突き出そうとしました。そして前回と同じことが起こりました。宗家が私の手から棒を打ち落としたとき、私はまた意識を取り戻しました。しかし今度はちょっと違ったのです。意識を取り戻した時、棒を突き出すのにはそんなに肉体的な力を要しないのに、私は汗びっしょりでした。なぜそうだったのかは解りませんでした。
宗家は私を見て、「さあ、もう一度」と言いました。
何と言ったら良いのでしょう？　同じことが繰り返されました。しかしこの三回目の時、私は自分のエネルギー、やる気が全部消えてしまいました。汗を掻いて、体から完全に力が抜けた感じでした。弱くて体が震えていたのです。私の足は、私をやっと稽古相手の前まで運んでくれたくらいでした。心の中に妙な感じが残ったのです。宗家が一瞬私の魂を奪ったか、私の意識を消してしまったかのようでした。一瞬、時間が存在しなくなったような感じでした。
このことは何と呼んだら良いのか解りませんが、自分の今までの半生の中で、もっとも面白い、そしてもっとも恐いものの一つです。

その日その後（そしてそのあと数日間）、私はどもっている馬鹿にみられました。少なくとも私は、そういうふうに感じていたのです。集中できなくて、肉体も頭脳も普通のようには全然機能していませんでした。
休憩時間にそのことを宗家に尋ねました。自分に何が起こったのか、知らなければならないと感じていました。宗家は両手を広げて（もし私がその時の精神状態でも正しく理解したとすれば）、「これはシンゲンというものだ」と言いました。そしてなぜ私を選んだのか少し話し、最後に「スヴェネリックさんほどの経験を積んでいない人を選んだとしたら、その人は気違いになったかも知れない」と言いました。私は大きなフラストレーションを感じ、魂も頭もまったく空だと感じていたので、正にその通りだと信じました。

その日の午後、宗家に、棒で好きなように攻撃して来いと言われました。宗家は剣で自分を守ると言いました。
自分のベストを尽くしたのですが、まだ弱くて、その前に起こったことについてのフラストレーションから抜けきれなかったので、心配でした。またアレをされるのかと恐かったのです。
攻撃するときはできるだけ集中しました。宗家からは鬼のような気配を感じました。彼と私しか存在しないで、周りの物も人も全部消えていました。宗家は私の周りのあらゆるところにいると同時に、どこにもいなかったのです。正直に言えば恐ろしかったです。

宗家は私の状況が解ったようで、「今度はどういう感じだった？」と聞きました。皆さんは解ると思いますが、私は「恐ろしかった」と答えました。

私は聞き返しました「宗家はどうやって剣法をこのように完璧にマスターできるのですか？　またどうやってこんなフィーリングを放射できるのですか？」。宗家はまた少ない言葉で答えました「腹から来るものです」。

後でシンゲンを考えたら、五段のテストとの類似点に気付きました。

そのテストに正しく受かった人は皆解っていますが、受かったらそのテストはたくさんの感情的なフィーリングを実現しますので、それらに対応するまでは結構時間が掛かるかも知れません。

テストに正しく受かったら、自分の中でより広い意識が生まれ、無心を掴むという心の用意はできています。

このシンゲン（言葉が間違っていなければ）の場合は、むしろ人生の中の何かが止められる（あるいは一瞬取り除かれる）のです。だからこれはより怖くて難しいもので、扱い方が違います。

しかし私は、こういうふうに考えるようになりました。何も与えないで、取ることだけは不可能です。私は宗家から、私が宝だと思っているものをもらいました。これはあらゆる物理法則の向こうにある個人的な体験で、そのお陰で私は今、心の底では感情の大きな平安を得ました。

私は何も予想しないこと、すべてに用意することを学びました。

宗家、また一つ忘れられない瞬間をどうもありがとうございました。

山　彦

シンゲン、震源とは、地震の起こった地点と解されますが、スヴェネリックさんには空中に発生したマグニチュードが伝達されたのでしょう。こんな現象を見ても、武風的会話は常識的な言葉だけによるものではないことが立証されていると言えるでしょう。言葉を持たなかった古代人たちの間に、ボディランゲージによる伝達や深層心理・ＥＳＰによる伝達作用があったという説もうなずけることと思います。

これは、真剣型の真剣の詞韻が、スヴェネリックさんの槌骨・砧骨・鐙骨を通して鼓膜へと、一般的会話ではないもっと太平な音、今はやりの表現法で言うならば「生気」の音と化して響いたのでしょう。稽古の一つの法方として――方法と書いても良いでしょう。常識をひっくり返した筆法ですが、これも武風的な表現の一つです――、稽古の一過程、修行の一過程の道程において、実戦的な感覚を養うのは大切なことです。この真剣型は、私が修行した九流派にはすべて含まれているもので、実戦、そして通常の社会を生きる、生き抜く、静と動の勘を養うことができます。九鬼神伝竜ではこれを「九鬼神念術」と言って、秘伝とされております。

忍術：稽古と自己防衛

エリアス・
クルザイヴァツキ（士道師）

戸田先生や高松先生は、どんな稽古をしたのでしょうか？　以前に稽古していなければ、縦に一間も飛んだり、指一本でとんぼ返りをすることなど、できるはずがありません。

私は今二十四歳で、十年稽古しています。六段を持っていますが、他の高段者と同様に、私の忍術についての知識がどれだけ浅いのか、判るようになりました。私の頭の中で、いくつかの質問が絶えず現れたり消えたりしています。

私は、稽古と道場の外の人生を、調和させることができました。私がいつも持ち歩いている、自信や幸福という忍術のより深い部分です。

しかし、途中に何かが抜けていると、突然感じることもあります。稽古の中で一番基本的なものです。私は、先生が一度私たちに語った言葉に従ってきました。「武道は一生涯やるものだと判って欲しい。だから、若い時にあまり稽古し過ぎない方がいい」。

私はこれに賛成し、いつもこの通りにしようと思っています。今すぐすべてを習わなければならないというような焦りは感じません。私は、これから長い間稽古が続くのだと判っています。

最初の質問に戻ると、こういった動きの裏にある稽古。この裏にどういう稽古があるのでしょうか？　肉体的訓練？　柔軟体操？　それとも、内面的な力と何かの関係がありますか？

多くの人が、私と同じように感じているのではないでしょうか？　私たちは体術を、忍術のエッセンスを理解しましたが、先生が見せてくださる素晴らしい動きにはついて行けません。高松先生や他の宗家について聞くことに関しても同じです。私たちはこの場合、麻痺しているようです！　多くの人は、ナンセンスだとか超能力の伝説だとか言って、否定するかも知れません。これは、自分たちの人生の中で、そういうものを経験したことがないからかも知れません。自分の五感で理解できないものがあると、受け入れられないからかも知れません。

私は先生と一緒にいるときでも、普通の人生の中ででも、理解できないことを自分で経験しています。私は、こういうことを理解しようとしないで、そのまま認めようとしました。五段の審査がその一例です。

私が求めているのは、こうした肉体的な動きの中で、どれをマスターできるのか、どれを放していいのかという、細い境界線なのかも知れません。もちろんこれは、各個人の能力による部分が大きいのですが、それは各自が自分で知るしかありません。私は自分の限界がどこにあるのか、とてもよく判っています。自分の能力の半分も使っていないということも、判っています。

先生、あなたはもう六十歳を越えていますが、高松先生がそうだったと聞くように、あなたもいまだに自分の体術と力で、私たちを常に驚嘆させています。そして私は知りたいのです。先生が若かったころ、どこまで自分の能力を試しましたか？　高松先生や戸田先

生はどうだったでしょうか？

今のように座って文章を書くと、途中で他の質問が必ず出てきます。「エッセンス・オヴ・忍術」の中に、高松先生や彼の稽古について書かれているところがあります。もし私の理解が誤っていたら直していただきたいのですが、高松先生はよく一人で稽古をしていたように思われます。私は神伝不動流のビデオの中の肉体的訓練も、虎倒流のビデオの中の巻藁訓練も見ました。そのほか、日本で先生から直接聞いたこともあります。先生は私たちに、パンチ・バッグでどう訓練するのかや、高松先生が木を殴っていたことを話してくれました。そして彼が手の怪我を何かの膏で治したということも、先生から聞きました。

ここが私が、自分には何かが抜けていると感じるところです。私は体術に伴うような訓練を求めています。ウエイト・トレーニングは好きですが、生徒の何人かの体術が、それで駄目になったことを見て、少し懐疑的になりました。彼らの体術はロボットのように強く（コワク）なり、体術に肉体的力をたくさん使うようになったことも判りました。もしかすると肉体的訓練は、神伝不動流のビデオにあるものと同じように、もっと体術の動きに近い方が良いのでしょうか？

私が目指しているのは、自分の武道をより「総合的」にすることです。馬術や手裏剣術といった、伝統的な忍法訓練を身に付けようとするときもあります。忍法体術が、こういう訓練にどういう影響を及ぼすのかを見ることが楽しいです。

終点は何でしょう？

難しい肉体的動きを学び、そしてクタクタにならないでそれをずっと維持するためには、どのように、どのくらい強く稽古をすれば良いのでしょうか？

これに答えるのは多分大変難しいでしょうが、新鮮である初心者から良く出る質問です。私はいつも先生の言葉を借りて答えています。「キープ・ゴーイング」。これは「あまりたくさん考えずに、ただ稽古を続けていれば、物事はだいたい自然に解決する」という意味で使っています。ただし、自分ではその答えに満足しません。先生から直接的な解答を得ることは望んでいませんが、もう少し昔の稽古についての話や、私が書いたことについてのご意見を聞かせていただけたら幸いです。

次の課題として、私は自分が忍術およびそれを修業している人の何人かについて、どう感じているのか述べたいと思います。

「山脈」を読むとき、自分が考えていたことがそのまま書いてあると感じることがあります。これはもしかしたら、私たちの多くが同じ方向に成長し、忍術を同じように理解し、見て、表現することなのかも知れません。

残念ながら忍術が何なのか判らない人もいるようです。私たちが今日稽古しているのは「武道」であるから、その言葉を見ればどういう意味か判るはずです。ただ伝統的で意味のない儀式を、健康や美容のためにやっているわけではありません。それも稽古の一部なのかも知れませんが、ポイントは自己防衛であり、戦いにあります。現在、道場の中の稽

古と実戦とを、区別できない人が多すぎるようです。自分を守らなければならない状況は、どこで直面するでしょうか？　まず道場の中ではないでしょう！

私が言いたいのは、稽古のために道場に行くときは、それなりに準備ができているということです。頭は二時間の稽古の方に向いています。しかし、自己防衛のシチュエーションは、同じように準備することができるでしょうか？　多分できないでしょう！

このようなシチュエーションはとても速く起こり、思いも付かないときにやってくるのです。どんな状況でも、自分を守ることができなければなりません。ですから、「今日は足が痛いから稽古できない」と誰かが言ってきたら、私はびっくりします。その怪我で自己防衛のシチュエーションに遭ったらどうしますか？　その場合は「今日は休む」とは言えないでしょう！

誰かが本当に怪我をしていたら、それでも稽古すべきだとは言いませんが、「昨夜飲みに行ったから頭が痛い」というような言い訳は……。

人生は現実として、人の精神にも怪我にもお構い無しだということを理解しなければなりません。この意識がなければ、こういう怪我は自己防衛の中でデメリットになります。

敵がその怪我を見て、自分の利点とすることもあるかも知れません。そして自分の怪我をもっと危うくしない方法で、自分を守らなければなりません。しかし、こちらが怪我をしていると、相手は自分が有利な地歩を占めていると思って自信過剰になり、無知になるかも知れません。

ある時、受身の練習をしていた際に、私は自分の弟子たちにこう言いました。「自分を、死んでいるものからさえ守ることができなかったら、どうやって動いている人から自分を守ることができると思いますか？」。なぜそう言ったのかというと、飛鳥回転を間違って行い、自分たちを痛めてしまっていたからです。そして受身を変えることもなく、ずっとそのまま続けていたのです。

現在、多くの人々は、この知識を持たないで稽古しています。それでも自己防衛のシチュエーションに対応できると信じています。そしてもっとひどいのは、自分が痛むことはないと思い込んでいることです。

この人たちの武道は、自分を守るものではなく、自分を殺すものになってしまいます。

山彦

若いうちは、欲望と煩悩のパワーが非常に強いものであり、そのためこれらに翻弄されやすいという危険があります。ここで言う「若いうち」というのは、武風の修行過程を指すもので、年齢とは関係がありません。要するに武風一貫する姿の中で、欲望と煩悩の大きさがどのくらいか、またどのくらい重いか、どのくらい障害になっているか、ということを自覚するのが大切な問題であり、これが修業中の自己防衛の一つの課題となっている、という事実を知ることが大切なのです。

超能力の伝説というのは得てしてあるものですが、人間の「自然力」の伝説というものは、確実に存在しているものですね。このような現象は高松先生に見ることがありましたが、私自身にも起こっています。こういう現実は自分自身、真心を持

って大切に自覚するようにしております。

終点は何でしょうか？　私は即座に答えられます。花の咲く極楽だと。

高松先生は、これを「花情竹性」という一語として、私に書き残されました。武人は、花のような優しく清い心で、真っ直ぐに障害（竹の節）を越えて行くということでした。

アビ・アレン嬢と稽古中の宗家
宗家は、「真剣型には男性も女性もない。性を超越する稽古を発見することである」と語る

私は、五段以上の武友に良く言うのです。武道が上達したかったら、道場で稽古するだけでは不十分だ、道場で修業した生きる感覚を実社会でどう活かせるかということも稽古なのだ、と……。

それから、自分の癖を発見して、反省・自覚することも大切だと言っています。

（飼い猫のコンテストでの）猫の審査を例にとって説明しましょう。例えば、何回かの審査に勝ち残った優秀な五匹の猫が審査台の上に残ったとしますと、そこでの審査員の審査の方法は、欠点のある、つまり癖のある猫からふるい落として行くのです。言うなれば、欠点の少ない、癖のないものがグランドチャンピオンになれるということです。

人生も武道も、こんな見方を大事にして、修業の糧とすることです。

欠点や癖は、真剣型でいう死に通ずるものがあるからです。

五段審査回想録

吉田信一（士道師）
芸名　和希政幸（宗家命名）

昨年の十一月三〇日より十二月二日までの三日間、東京武道館にて開催されました武神館セミナーにおきまして、五段審査を受けさせていただきました。

宗家からは、以前より「そろそろ五段の審査をやってみるか。」と言われておりましたので、気持ちの準備はできているつもりでした。が、当日はその年の締め括りでもあるセミナー、しかも初日であったこともあってか、動揺してしまい、「なんて、自分は弱いんだろう。」とつくづく思いました。

さて、いよいよ審査です。宗家に呼ばれて正座して目を閉じました。この時は、「宗家に打たれるのだから、避けられなくて当たり前、打たれても宗家に打たれて死ねるなら本望」と、大袈裟のようですがそう思っていました。宗家の竹刀が頭の上に置かれ、「スタート！」と気合にも似た宗家の声が、館内に響き渡りました。その瞬間周りの音が消え、真っ白になったとでも言うのでしょうか、実に不思議な感覚に包まれました。次の瞬間、自分の肩が後方に強く引かれた感じがして、回転していたのです。どう回転したのか、自分でも判りません。我に返ると、宗家の笑顔と拍手する皆さんの姿が目に入りました。実に不思議な、そして貴重な体験でした。

稽古中の吉田信一士道師。
宗家は「日本では時代劇や歴史ものの映画やテレビ番組は多いが、正しい武芸を知っている殺陣師はほとんどいない。その意味で、彼のような人材は大切だ」と語っている。

五段を通過させていただいた現在、私などまだまだ未熟者であります。段位に見合う人間に成長するよう、今後とも努力して行こうと思います。

最後になりますが、宗家に、武神館に出会えたことに、改めて感謝したいと思います。武神館の皆さん、今後ともご指導のほど、よろしくお願い申し上げます。

※　なお、私は芸能の仕事をしておりますが、こちらでも宗家には色々とご指導を受けております。別の機会に、そのことに関しても色々と投稿してみたいと思います。

山彦

五段のテストとは、宗家から発するパワーからだと思われる方が多いと思いますので、そうでないものがそこに介在しているという事実をお話ししましょう。

もう十数年も前のことです。ある生徒に五段のテストを何回もやりましたが、何回やっても受からないのです。そこで私は、その生徒に対して刀の本身（真剣）を抜いて見せ、これでやるぞと言って座らせました。しかし本身では危険性もあるので、私はそっと竹刀に持ち代えて、念力を放ち上段に振りかぶりました。間、一閃……強い念力で切り下ろす瞬間、道場の電灯が消えたのです。ブレーカーが落ちてしまったのです。その瞬間を見ていた弟子たちは、私のパワーの恐ろしさに驚いておりました。

しかし数年後、それがパワーばかりではないという教えが帰ってきたのです。電灯が消えたのは、「その生徒は五段を取らせてはいけない人物である」という神からの稲妻、教えだったのですね。この時同席していた現在の高段者に聞いてもらえれば、神の教えと五段テストのはっきりとした関係を知ることができると思います。

摩訶不思議な超能力や奇跡や神通力を求めるのは人間の常ですが、高松先生はよくこう言われました。「神通というものは、人間の真心がつなぐものやで」と。先生に真心が第一と言われた日を今日だと思いながら、私自身も無心の稽古に一貫しております。

大切なことは、何回も重複して噛み締めることです。そのために、真心とか武道家の心ということを書き続けます。

山彦　（ビデオ、東京道場稽古日、大光明祭について）

今回、五本のビデオ（１９、２０、２１、２２、２３）を製作いたしました。これは、剣を持つ者が今まで知らなかったものと言っても良いでしょう。剣を持つ者にとって、、剣の本質・剣の道を知るためにも、大切な映像なのです。次の棒術もしかりです。棒術という高度な勘覚・観覚・完覚を持つ、棒の生態を知っていただくために製作したものです。

現在、高松先生に教えていただいたことがないのに、教わったと言っている人もおりますが、このビデオを見ることによって反省してもらい、化けの皮を剥いであげる時が来たようです。武道には武道家の心が大切です。高松先生が良く言われた言葉です。

１９９４年、武神館道場本部が主催する「大光明祭セミナー」は、東京武道館において、１２月１日、２日、３日の３日間行われます。２日の夜のパーティーでは、「十勇士」の面々が演武を披露します。

今回のセミナーの目的は、槍・小太刀・体術、その真剣型・自然型の指導を行うことです。世界の武友も競って参加するということです。

武神館東京武道館道場予定表

月	日						
7月	1（金）大	5（火）	11（月）	15（金）大	19（火）	25（月）	29（金）
8月	2（火）	9（火）	12（金）二	18（木）	22（月）	25（木）	29（月）二
9月	1（木）二	6（火）二	12（月）	22（木）大	26（月）大	29（木）大	
10月	7（金）	14（金）	21（金）大	24（月）大	28（金）	31（月）二	
11月	1（火）	10（木）	14（月）	17（木）	24（木）	28（月）	
12月	8（木）	12（月）	15（木）	20（火）二入			

入；入り口側半面
二；第二道場
大；大道場

道場　東京武道館
東京都足立区綾瀬３－２０－１
TEL (03) 5697-2111

交通　地下鉄千代田線「綾瀬」下車徒歩５分

武神館本部道場事務所　宗家　初見良昭
〒２７８　千葉県野田市野田６３６
TEL　(0471) 22-2020
FAX　(0471) 23-6227

自主稽古　１７：００～１９：００
稽古　１９：００～２０：３０

第二道場 (2F) は素足で使用

BUJINKAN TOKYO BUDOKAN DOJO SCHEDULE 1994

JUL	1 (Fri) L	5 (Tue)	11 (Mon)	15 (Fri) L	19 (Tue)	25 (Mon)	29 (Fri)
AUG	2 (Tue)	9 (Tue)	12 (Fri) #2	18 (Thu)	22 (Mon)	25 (Thu)	29 (Mon) #2
SEP	1 (Thu) #2	6 (Tue) #2	12 (Mon)	22 (Thu) L	26 (Mon) L	29 (Thu) L	
OCT	7 (Fri)	14 (Fri)	21 (Fri) L	24 (Mon) L	28 (Fri)	31 (Mon) #2	
NOV	1 (Tue)	10 (Thu)	14 (Mon)	17 (Thu)	24 (Thu)	28 (Mon)	
DEC	8 (Thu)	12 (Mon)	15 (Thu)	20 (Tue) #2 A			

A - Entrance side
#2 - No. 2 Dojo
L - Large Dojo

Dojo address:

東京武道館　東京都足立区綾瀬３－２０－１ (Tokyo Budokan, 3-20-1 Ayase, Adachi-Ku, Tokyo)
TEL. (03) 5697- 3111

To get to the Tokyo Budokan from Tokyo, take the CHIYODA （千代田） subway line from NISHI NIPPORI （西日暮里） getting off at AYASE （綾瀬）. The dojo is about 5 minutes walk from the station.
From Noda, go to KASHIWA （柏） and change to the CHIYODA subway line (Platform 1). The ticket cost from NODASHI to KASHIWA is ￥190. From KASHIWA to AYASE is ￥290.

Training Times:

The Budokan opens at 17:00 (for free practice). Training is from 19:00 to 20:30.

Training Fees: ¥3,000 per class.

編集後記

武神館伝書「山脈」の第五号をお届けします。

お読みいただけば判るとおり、今回は寄稿者の疑問や所感に対して、宗家が適時回答や指導をしてくださっています。これが「山彦」です。

ただ、多忙な宗家に一つ一つの原稿に回答を書いていただくため、今回は刊行の間隔が開いてしまいました。読者の皆さんにはご迷惑をかけたことと思います。

今後システムが整って行けば、よりスムーズに出版できると思われますので、どうか長い目で見守ってください。

「山脈」はまだまだ発展途上です。体裁や掲載記事の構成などは、今後も変わって行くでしょう。そのたびに少しずつ良いものにして行きたいと考えております。

編　集　部
〒278　千葉県野田市野田636　Tel 0471(22)2020
武神館本部道場事務局

編集長　林　靖之

武神館伝書　「山脈」　第二巻第二号
平成六年八月十日発行　（通算五号）

発行者　初見良昭
発行所　武神館道場
千葉県野田市野田636　〒278
Tel 0471(22)2020
FAX 0471(23)6227

＊　許可なくして複製・転載を禁ず

Bujinkan Videos Order Form

武神館ビデオ注文書

No.	Video Title	No. of copies	Price each (Yen)	Total price
1	Koto Ryu Koppo-Jutsu 虎倒流骨法術		7200	
2	Takagi Yoshin Ryu Jutaijutsu 高木揚心流柔体術		7200	
3	Kukishinden Ryu Yoroi Kumiuchi 九鬼神伝流鎧組討		7200	
4	Gyokko-ryu Kosshijutsu 玉虎流骨指術		7200	
5	Togakure Ryu Ninpo Taijutsu 戸隠流忍法体術		7200	
6	Shinden Fudo Ryu Daken Taijutsu 神伝不動流打拳体術		7200	
10	Kukishinden Ryu Hanbo-jutsu & Shikomi-zue 半棒術、仕込み杖		7200	
11	Ninpo-Masaaki Hatsumi's Video Dojo 忍法・ビデオ道場		7200	
12	Bugeisha no tame no Jutte-jutsu 武芸者のための十手術		7200	
13	Ninja Biken 忍者秘剣		7200	
14	Daikomyosai Bujinkan Kokusai Seminar 1 国際セミナー1		5800	
15	Daikomyosai Bujinkan Kokusai Seminar 2 国際セミナー2		5800	
16	Rokushakubo-jutsu 六尺棒術		7200	
17	Daikomyosai Bujinkan Kokusai Seminar 3 国際セミナー3		5800	
18	Daikomyosai Bujinkan Kokusai Seminar 4 国際セミナー4		5800	
19	Mutodori 無刀捕		7200	
20	Shinken Shirahadori 真剣白刃捕		7200	
21	Gyokko Ryu Bojutsu 玉虎流棒術		5800	
22	Sabaki no Bojutsu 捌きの棒術		5800	
23	Kasumi no Bojutsu 霞の棒術		5800	

TOTAL 合計 ¥

Video system: NTSC ☐ PAL ☐

The cost of each video includes postage & packing. All payments must be in Japanese Yen (¥). Any other forms of payment other than cash and International Postal Money Orders will be returned to sender.

Students should order individually (i.e. teachers must not order several copies for their students).

Orders should be sent to:

Bujinkan Dojo Honbu
636 Noda
Noda-Shi
Chiba-Ken 〒278
JAPAN

Please print your mailing address **clearly here**

禅